

ICT理論でまちおこし、崇城大教授らが熊本の商店街に放送局

産経新聞 6月19日(金)7時55分配信

ツイート 3

シェア 277



SCB放送局新市街スタジオで地元プロバスケットチームの番組を制作する崇城大情報学部の学生（写真：産経新聞）

熊本市中央区の新市街商店街に、地域活性化の拠点として放送局が誕生した。個人所有の多数のパソコンをネットワーク化することで、スーパーコンピューターに負けない性能を発揮するというICT（情報通信技術）上の理論を、まちおこしに応用しようという取り組みで、崇城大（中山峰男学長）情報学部の星合隆成教授が中心となっている。（南九州支局 谷田智恒）

飲食店などが並ぶ、にぎやかな商店街。そのビルの1～2階に今春、崇城大の「SCB放送局 新市街スタジオ」がオープンした。

ガラス張りで、1階部分は放送スタジオ、2階部分はフリースペースとなっている。スタジオでは崇城大の学生が、地元のプロバスケットチーム「ヴォルターズ」の情報発信するネット番組をオンエア。2階では、IT塾が開かれていた。

「人を集めるのではなく、人が集まる場所を作りたかった。アイデアや技術を持つ人々が、この場所で自然とつながり、課題解決に向けた何かを生み出す仕組みにしたい」

こう語る星合氏はもともと、地域活性化や街おこしではなく、コンピューターネットワークの専門家だ。

星合氏はNTTネットワークサービスシステム研究所の主幹研究員だった。平成10年、ネットワーク理論「ブローカレス理論」を提唱し、世界的に注目された。これは、大型のサーバコンピューターを中心にネットワークを構築・維持するのではなく、自立分散する中小型のコンピューターをつなげて、情報をやり取りするという理論だった。

ブローカレス理論を応用し、NTT西日本は「グリッドサービス」を実用化した。ネットワークにつながった膨大な数のパソコンを活用し、スパコン並みの計算能力を実現させた。このサービスはすでに終了しているが、遺伝子の構造解析や気象予測などが行われたという。

星合氏はブローカレス理論を、コンピューターネットワーク上だけでなく、人的ネットワークの形成や地域コミュニティの構築に応用しようと考えた。

そこで誕生したのが、地域コミュニティブランド（Social Community Brand、略称SCB）の発想だった。個人所有のパソコンをつないだように、地域おこしに関わる人々が結びつき、自発的に取り組みを進めることで、最大限の効果発揮を図る。また、その取り組みそのもののブランド化を目指す。

SCBの発想に沿って、すでに全国で50のプロジェクトが動いている。

例えば、繊維産業の町、群馬県桐生市では「nunotech（布テク）」の名称で活動が始まった。地元のメディア関係者と工業デザイナーらが交流する中で、若者のアイデアを取り入れた「iPadケース」などの商品がすでに実用化されている。

星合氏は24年、崇城大教授に就任した。崇城大は26年4月、熊本市西区のキャンパスに最新鋭スタジオ「SCB放送局」を開設した。ここを拠点に人的ネットワークがつながりはじめている。「熊本競輪活性化プロジェクト」など、放送局を拠点に学生と地域住民や専門家、自治体職員も参加して、番組制作や情報発信が進んでいる。

新市街商店街のスタジオは、放送局の第2弾として開設した。番組はインターネットの動画サイトやラジオで配信している。

地域だけでなく、崇城大の学生にとっても、放送技術習得や、コミュニケーション能力向上などのメリットがあるという。

星合氏は「ICTの世界の考え方を地域に導入することで、活性化を図りたい。熊本で成功させ、全国へさらに拡大していけば、日本の底力になるはずだ」と語った。

ツイート 3

シェア 277

最終更新:6月19日(金)7時55分, 2015